

# 人格特性的自己効力感研究の動向と 漸成発達理論導入の試み<sup>1</sup>

三好 昭子<sup>2</sup> 筑波大学 大野 久 立教大学

Review of studies on generalized self-efficacy and the explanatory potential of epigenetic theory

Akiko Miyoshi (University of Tsukuba) and Hisashi Ōno (Rikkyo University)

In this article, we review studies of generalized self-efficacy (GSE) involving the characteristics, measurement, changes, and formation of GSE. We discuss controversial issues regarding developmental changes in GSE, such as the age at which GSE develops and becomes established, and its causal direction, i.e., does task-specific self-efficacy have an effect on GSE, or does GSE have an effect on task-specific self-efficacy. We suggest that studies of GSE should be designed to address these questions. Since it is possible to study the long-term development of GSE using epigenetic theory, we suggest that this theory should be the theoretical framework for GSE studies. GSE studies would also benefit from consideration of the theory of competence (concept of virtue) based on the perspective of healthy ego-development. Moreover, not only positive aspects of GSE, but also negative aspects, such as over-aspiration, should be investigated. We conclude that multifaceted studies of GSE based on theories of personality development should be undertaken.

**Key words:** generalized self-efficacy, self-efficacy, epigenetic theory, competence.

*The Japanese Journal of Psychology*  
2011, Vol. 81, No. 6, pp. 631-645

本論文の目的は、人格特性的自己効力感研究の動向について論じ、今後の一つの展開として、生涯発達の視点をもつ Erikson の漸成発達理論を導入する試みを提唱することである。そのためにまず、これまでに行われてきた領域固有の自己効力感研究の概略と人格特性的自己効力感研究の始まりについて説明する。そして人格特性的自己効力感研究の動向として、測定についての研究、精神的・身体的健康や職業領域との関連についての研究、変化、形成過程に関する研究という観点から論じ、その上で今後の展開について漸成発達理論の導入を試みる。

## 領域固有の自己効力感研究の概略

1977 年に Bandura が “Self-efficacy: Toward a unify-

ing theory of behavioral change” という論文を発表してから 30 年が過ぎ、自己効力感 (self-efficacy) という用語は、心理学だけでなく、社会学、運動学、健康、医学、看護学など様々な領域に広がった。Bandura (1977) は、行動の先行要因として予期機能 (期待) を重視し、ある行動を自らが成功裏に実行できるという確信を自己効力感として概念化した。つまり自己効力感こそが人間の行動のもっとも重要な決定因であり、自己効力感の上昇が行動の効果的な遂行へとつながるというのである。

Maddux (2001) は、“The little engine that could” (Piper, 1978) という絵本の 1 フレーズ “I think I can. I think I can. I think I can.” を挙げ、自分が成し遂げたいことを成し遂げることができると信じることは、成功においてももっとも重要な要素かもしれないと述べ、20 年以上にわたる膨大な数の自己効力感研究を要約している。また、竹綱・鎌原・沢崎 (1988) による初期の自己効力感研究のレビュー、Bandura (Bandura, 1995 本明・野口監訳 1997; Bandura, 1997) による広範な自己効力感研究の紹介、廣瀬 (1998) による進路に関する自己効力感研究のレビュー、坂野・

Correspondence concerning this article should be sent to: Akiko Miyoshi, Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tennodai, Tsukuba 305-8572, Japan (e-mail: amiyoshi@human.tsukuba.ac.jp)

<sup>1</sup> 本論文は第一著者が立教大学大学院現代心理学研究科に提出した 2008 年度博士論文の一部を加筆・修正したものである。

<sup>2</sup> 日本学術振興会特別研究員

前田 (2002) による臨床場面における自己効力感の応用研究などは、いずれも自己効力感研究を概観する上で参考になる。

膨大な数の自己効力感研究は、自己効力感が行動を予測する、あるいは自己効力感の変容が行動の変容に強く影響するということを実証している。坂野・東條 (1986) が Bandura (Bandura, 1977; Bandura 重久訳 1985) の記述を次のようにまとめている。ある行動に対する自己効力感が高ければ“社会的状況の中での克服努力が大きい。積極的に多大の努力を払おうとする。積極的に課題に取り組む。最終的な成功を期待する度合いが大きい。葛藤状況で長期的に耐えることができる。自己防衛的な行動が減少する。予期的な情動喚起の程度が緩和される。などの行動特徴が認められる” (坂野・東條, 1986, p. 75)。そして Maddux (2001) は自己効力感研究の要約を Dweck (2000) の著書の言葉でまとめ、“自信、努力、粘り強さは先天的な才能よりもずっと強力だというシンプルでパワフルな真実が、自己効力感研究の永久のメッセージである” (Maddux, 2001, p. 285) と述べている。このように自己効力感の理論は着実に実証的なデータを積み重ねながら、心理的適応と不適応において、また情緒と行動の問題への効果的な介入において重要な役割を果たしてきた。

#### 人格特性的自己効力感研究の始まり

不安に状態不安と特性不安があるように、自己効力感にも 2 つの水準があることが知られている (成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田, 1995; 坂野・東條, 1986; Sherer, Maddux, Mercandante, Prentice-Dunn, Jacobs, & Rogers, 1982)。一つは“課題や場面に特異的に行動に影響を及ぼす自己効力感” (成田他, 1995) であり、領域固有の自己効力感と呼ばれている。もう一つの水準は、自己効力感が行動の持続性に対して長期的に影響を与える (Bandura, 1977) という指摘から派生した概念であり、“具体的な個々の課題や状況に依存せずに、より長期的に、より一般化した日常場面における行動に影響する自己効力感” (成田他, 1995) である。これは generalized (general) self-efficacy (以下 GSE とする) と呼ばれており、“自己効力感のある種の人格特性的な認知傾向” (成田他, 1995) とみなしたものである。“self-efficacy を高くあるいは低く認知する傾向は、いわば人格特性のように人の行動を規定するもの” (坂野・東條, 1986) であり、GSE の高い人は、日常的に様々な領域においてきつとできるだろうという確信をもちやすい傾向にあるといえる。日本では特性的自己効力感 (成田他, 1995)、一般性セルフ・エフィカシー (坂野・東條, 1986) と呼ばれているが、ここでは領域固有の自己効力感に対して人格特性的な自己効力感を強調し、人格

特性的自己効力感 (三好, 2003) と呼ぶ<sup>3</sup>。

GSE についての研究は、Sherer et al. (1982) が GSE を測定する尺度を作成したのをきっかけに、1980 年代後半になってから研究が増えはじめた。2009 年の現在において PsycINFO で検索すると、学術誌に限定してもアブストラクトに generalized self-efficacy あるいは general self-efficacy を含む論文は 328 も存在している。しかしながら領域固有の自己効力感の 9 192 という論文数に比べると、GSE 研究はまだ本格化していないといえるのかもしれない。領域固有の自己効力感研究においては、自己効力感の低いことのメリット・低いことのデメリットが強調されているが、それならば自己効力感を一般的に高く認知する傾向・低く認知する傾向である GSE の研究も重要である。なぜなら GSE には個人差の存在が想定され、特定の状況だけでなく、未経験の新しい状況においても適応的に処理できるという“期待”に影響を与える (Sherer et al., 1982) からである。

#### GSE 研究の動向

##### GSE の測定に関する研究

GSE の測定に関して先駆的研究である Sherer et al. (1982) の作成した特性的自己効力感尺度 (Generalized Self-Efficacy Scale) は、成田他 (1995) によって、日本のコミュニティサンプルに適用され、生涯発達の利用の可能性が検討された。その結果、この尺度が性別や年齢に依存することなく使用可能な尺度であり、また、内的整合性、信頼性、妥当性も高いため、研究への応用にも十分に耐え得ることが示された。項目は社会的スキルや職業的能力の観点から作成されており、行動を起こす意志、行動を完了しようと努力する意志、逆境における忍耐などから構成されている。具体的には“何かをしようと思ったら、すぐに取りかかる”、“初めはうまくいかない仕事でも、できるまでやり続ける”、“面白くないことをする時でも、それが終わるまで頑張る”などが挙げられる。

一方、臨床心理学的な観点から坂野・東條 (1986) が作成したのが一般性セルフ・エフィカシー尺度

<sup>3</sup> 領域固有の自己効力感については、あくまでも特定の領域や状況において、ある行動を自らが成功裏に実行できるという確信 (conviction) であり信念 (belief) であって、“人格特性 (personality trait) ではない” (Maddux, 2001, p. 278) という指摘があり議論が分かれる点である。しかし本論文では、一人の人間における領域固有の自己効力感を様々な領域で測定した場合、いろいろな領域固有の自己効力感をおしなべて全般的に高く認知する傾向にある人や低く認知する傾向にある人が存在しており、未経験の領域においても同様の傾向を示し、そこには比較的安定した個人差があるという考えに基づき、GSE を人格特性的な概念として扱っている。

(General Self-Efficacy Scale) であり、16 項目からなっている。これは自己効力感が高く認知された場合の行動特徴と自己効力感が低く認知された場合の行動特徴をもとに、MMPI および Y-G 性格検査の項目から選抜して作成されている。このようにして作成された尺度を因子分析した結果、行動の積極性（例えば“結果の見通しがつかない仕事でも、積極的に取り組んでゆくほうだと思う”）、失敗に対する不安（例えば“何かをするとき、うまくゆかないのではないかと不安になることが多い”）、能力の社会的位置づけ（例えば“友人より優れた能力がある”）という三つの因子が抽出された。この尺度も内的整合性、信頼性、妥当性が高く、臨床的応用や研究への応用に十分に耐え得ることが示されている。

これらの尺度項目は比較的客観的な行動特性からなっており、日常的にきつとできるだろうという確信をもちやすいか否かという GSE そのものを測定しているわけではない。そこで三好（2003）は、大抵のことはできるような気がするという感覚そのものを直接的に測定する、主観的な感覚としての人格特性的自己効力感尺度（the Scale Measuring a Sense of Generalized Self-Efficacy; 以下 SMSGSE とする）を作成した。質問紙調査による信頼性と妥当性の検討の他、面接調査による併存的妥当性の検討を行った結果、SMSGSE が 6 項目からなる 1 因子構造の、信頼性・妥当性ともに高い尺度であることが示された。具体的な項目としては、“どんな状況に直面しても、私ならうまくそれに対処することができるような感じがする”、“私にとって最終的にはできないことが多いと思う”（逆転項目）、“私が頑張りさえすれば、どんな困難なことでもある程度のことはできるような気がする”などが挙げられる。

また、日本語に翻訳されてはいないが、Tipton & Worthington（1984）の開発した Generalized Self-Efficacy Scale は、信頼（faith）に関する多面的な概念を測定するために開発された尺度の中の、“自己に関する信頼”因子をもとに作成されたもので、“身体的、あるいは情緒的な逆境に直面した際に、それを引き受け、粘り強く取り組もうする意志と決定に関した項目”（Tipton & Worthington, 1984, p. 546）によって構成されている。本来は 27 項目だが、因子負荷量の高い 10 項目から構成されている短縮版があり、比較的広く用いられている。他にも Schwarzer（1994）が作成したドイツ語の尺度（10 項目）、子ども用に開発された尺度（Cowen, Work, Hightower, Wyman, Parker, & Lotyczewski, 1991）などもある。

#### 精神的・身体的健康との関連に焦点を当てた研究

**GSE と抑うつとの関連** 1980 年代後半になり尺度開発が一段落すると GSE 尺度を用いて抑うつとの関

連の研究が始められた。例えば Davis-Berman（1988）は高齢者（平均年齢 70 歳）を対象にした調査によって、GSE が抑うつ得点を予測することを示した。他にも GSE と抑うつとの負の関連を示した研究は多い（Ehrenberg, Cox, & Koopman, 1991; Oliver & Paull, 1995）。

そもそも抑うつとは心理的不適応感を示す概念であるため、心理的な適応を予測する GSE とは負の関連が高いことが想定されており、実際、GSE の尺度を開発する際にも、抑うつに関する尺度は構成概念妥当性の検討として用いられている（成田他, 1995）。さらに坂野・東條（1986）は GSE の尺度作成において、臨床的妥当性の検討としてうつ病あるいは躁うつ病のうつ状態にある群、任意に抽出された標準群、専門家によって選抜された高自己効力感群における GSE 得点の比較を行い、GSE 得点によって病理群を弁別することができることを示している。

このように GSE は抑うつと密接な関連があり、一般的に自己効力感を低く認知する傾向にある個人（GSE の低い人）は抑うつ傾向が高いという結果は、理論的にも妥当だと考えられる。

**GSE と精神的健康との関連** GSE と抑うつとの関連についての研究は、GSE と well-being, quality of life（以下 QOL とする）といった精神的健康（メンタルヘルス）との関連の研究に広がっていった。

Waller & Bates（1992）は、健康な高齢者を対象として、その大部分が健康についてヘルス・ローカス・オブ・コントロールにおける内的統制型であり、GSE が高く、よい健康行動を行っていたことを示した。また、精神的な病気をかかえる個人とそうではない個人の QOL を比較し、精神的な病気をかかえる個人は QOL の大部分の側面においてネガティブであり、自尊心や GSE も低いことを明らかにした研究（Murphy & Murphy, 2006）もある。これらの研究（Murphy & Murphy, 2006; Waller & Bates, 1992）は GSE を従属変数として扱っている。

一方 GSE を独立変数として扱い、GSE などの人格的変数が精神的健康をどの程度予測することができるかについて検討した研究もある。Boer, Elving, & Seydel（1998）は、ガン患者のメンタルヘルスが一般の人よりもわずかに低く、GSE と孤独感はガン患者におけるメンタルヘルスに関連した主要な心理社会的要因であることを示した。他にも、発作による身体障害や失語症は介護者の不快ストレスの原因とならないのに対して、介護者の GSE の低さなど人格的資源は有意に不快ストレスの原因となることを明らかにした研究（McClenahan & Weinman, 1998）、マラウィ難民帰還におけるメンタルヘルスについて検討し、水や食べ物の不足から拷問やレイプといったトラウマ的な出来事を経験していないことと GSE がメンタルヘルス



を有意に予測したことを示した研究 (Gillespie, Peltzer, & MacLachlan, 2000), GSE が嚢胞性線維症<sup>4</sup>患者の主観的健康ステータスと QOL にとって肺機能と同じくらい重要であることを明らかにした研究 (Wahl, Rustoen, Hanestad, Gjengedal, & Moum, 2005) などもある。

いずれにしても精神的に健康な人は GSE が高く, GSE が well-being や QOL といった精神的健康をポジティブに予測している, あるいは GSE と精神的健康とは正の関連のあることが明らかにされてきた。

**心身の健康に対する GSE の機能** 心身の健康に対する GSE の機能についての研究は主に, GSE を調整変数として扱い, 外界からのストレスを個人内資源である GSE が和らげる働きのあることを強調している。Lightsey (1997) は, GSE の高い人はネガティブでストレスフルな経験をしている時でも不快気分にはならないままであるのに対して, GSE の低い人は, 高ストレス状況のもとで不快気分になる傾向があり, GSE がストレス緩衝装置として作用していることを示した。そして, 欧米の文化圏ではないグアムにおいても同様の結果が得られることを明らかにした (Lightsey & Christopher, 1997)。また Mikkelsen & Einarsen (2002) は, 職場でのいじめと精神的・心身症的健康被害との間の関連について研究した。その結果, いじめにさらされることは精神的健康被害の増加に関連しており, 心身症の被害の程度を増し, ネガティブ感情のレベルを上げた。その中で GSE は, いじめとは直接的には相関がないにもかかわらず, いじめと精神的健康被害との間の調整変数としての役割を果たすことが明らかにされた。つまりいじめにさらされたとき, GSE の高い人は低い人に比べて, 精神的健康被害をより少なく報告するのである。Oginska-Bulik (2005) も同様に, 労働者において, 職業ストレスを減じることとネガティブな健康成果を妨げることに於いて, GSE などの個人的資源や主観的なソーシャル・サポートといった社会的資源が有意な役割を果たしていることを確認している。

さらに久野・矢澤・大平 (2003) は, 急性ストレス事態における GSE と客観的に操作されたコントロール可能性がストレス反応にどのような影響を及ぼすかについて, 行動指標, 免疫指標, 主観的指標を用いて総合的に検討した。その結果, 一般にストレス負荷によって免疫機能は低下するが, GSE の高い人はストレスラーのコントロール可能性を実際よりも高く評価し, 心理的ストレスを低く評価することによって免疫

機能の低下を防ぐなど, GSE はストレスラーのコントロール可能性と免疫機能との間の調整変数であることを明らかにしている。

### 職業領域との関連に焦点を当てた研究

**GSE と職業満足・パフォーマンス, および人生満足との関連** GSE と職業満足・パフォーマンス, および人生満足に関する研究は, Judge, T.A. を中心とした研究グループによって行われてきた。GSE は自尊心の高さ, ローカス・オブ・コントロールにおける内的統制型, 情緒的安定性の高さとともに“コアな自己評価 (core self-evaluations)”として扱われ, 主に職業満足, 人生満足, 職業パフォーマンスとの関連で研究されている。

コアな自己評価 (自尊心の高さ, GSE, 内的統制型, 情緒的安定性の高さ) は, 職業満足と人生満足に直接的・間接的影響をもつ (Judge, Locke, Durham, & Kluger, 1998), 仕事の遂行への動機づけや仕事のパフォーマンスとも正の関連がある (Judge, Erez, & Bono, 1998), 動機づけとパフォーマンス, さらに目標設定行動にも関連がある (Erez & Judge, 2001), 子ども時代と初期成人期に測定されたコアな自己評価は, 中期成人期に測定された職業満足と関連がある (Judge, Bono, & Locke, 2000)。このようにコアな自己評価と職業満足, 職業におけるパフォーマンスとの関連の研究はこれまでも数多くなされてきたが, さらにそれらの積み重ねをメタ分析によって総括したのが, Judge & Bono (2001) である。職業満足に関しては, 自尊心の高さとは .26, GSE とは .45, 内的統制型とは .32, 情緒的安定性の高さとは .24 の相関があり, 職業におけるパフォーマンスに関しては, 自尊心の高さとは .26, GSE とは .23, 内的統制型とは .22, 情緒的安定性の高さとは .19 の相関があった (Judge & Bono, 2001)。いずれにしても GSE を含むコアな自己評価は職業満足, 人生満足, 職業パフォーマンスなどとポジティブに関連していることが示されている。

さらに Judge, Erez, Bono, & Thoresen (2002) は, 自尊心の高さ, GSE, 内的統制型, 情緒的安定性の高さそれぞれの尺度が互いに強く関連している 1 因子構造であり, 判別妥当性や増分妥当性も低いことを明らかにし, コアな自己評価尺度 (Core Self-Evaluations Scale) を開発した。12 項目の尺度は信頼性が高く, 1 因子構造を示し, 妥当性も高かった (Judge, Erez, Bono, & Thoresen, 2003)。非欧米文化である日本においても欧米文化圏における結果と一貫して, 自尊心の高さ, GSE, 内的統制型, 情緒的安定性の高さという四つの下位特性は 1 次元構造を示した (Piccolo, Judge, Takahashi, Watanabe, & Locke, 2005)。この研究では同時に欧米文化とは異なる文化

<sup>4</sup> 遺伝性疾患の一種で, 体内の水分の流れに異常をきたし, 粘液の粘度が高くなる。結果的に全身の外分泌腺臓器が障害され, 慢性呼吸器疾患, 消化器疾患, 泌尿生殖器障害などをもちやす病気。

においてもコアな自己評価の普遍性が示され、コアな自己評価が職業満足、人生満足、幸福の判断に大きな影響を及ぼしていることが明らかにされている (Piccolo et al., 2005)。このように GSE と他のポジティブな性質の人格特性をコアな自己評価として用い、コアな自己評価が職業満足、人生満足、幸福を予測することが示されている。

**GSE とキャリア形成との関連** 進路に関する自己効力感の研究は、伝統的に男性中心の職業に対する女性の自己効力感が低く、女性の職業選択における障害になっているという指摘 (Hackett & Betz, 1981) に始まり、キャリア教育への注目が集まるとともに増加してきた (Hackett, 1995 本明訳 1997; 廣瀬, 1998; 浦上, 2002)。つまり職業に関する領域固有の自己効力感、進路選択における具体的な行動を強く予測している。ここでは行動の予測ではなく、GSE の高い人はキャリア形成においてどのような特徴があるのかを明らかにした研究を紹介する。

パーソナリティに適したキャリアの選択が安定したキャリア形成に結びつく (Holland, 1997) という“職業的パーソナリティ理論” (三村, 2004, p. 40) を応用して、現実的、研究的、芸術的、社会的、企業的、慣習の仕事それぞれに対する自己効力感を測定するための尺度 Skills Confidence Inventory (Betz, Borgen, & Harmon, 1996) が開発された。この Skills Confidence Inventory (Betz et al., 1996) を用いて Lindley & Borgen (2002) は、GSE と ACT (米大学入学学力テスト)、GPA (学業平均値) によって測定された学業成績との間の関連を検討した。その結果、男女ともに GSE と研究的自己効力感、企業的自己効力感との間に特に強い関連があり、男性においてはそれら以上に慣習的自己効力感との関連の強いことが明らかにされた。学業成績については、男女ともに ACT 得点と関連があったのは研究的自己効力感のみであり、GPA は GSE とともに Skills Confidence Inventory とも有意な関連がなかった。つまり GSE は未知なことを明らかにしようしたり (研究的)、リーダーシップが求められる仕事 (企業的)、あるいは方法が決められた事柄を着実にこなす成果が認められる仕事 (慣習的) のスキルについての自己効力感とは関連があるが、学業成績とは関連のないことが示された。これは起業行動と有意に関連したパーソナリティ特性が、達成への欲求、GSE、革新、ストレス耐性、自律性への欲求、先見的パーソナリティであったこと (Rauch & Frese, 2007) と関連しており、職業への適性の研究としての展開が期待される。

また Argyropoulou, Sidiropoulou-Dimakakou, & Besevegis (2007) は、対象となった 17, 18 歳の高校生が三つの職業不決断クラスターグループ (決定、可能性の探求、不決断) に分類され、これらのクラス

ターグループは GSE、コーピング方略、職業興味において有意に得点が異なることを明らかにした。そして職業上のカウンセリングの際にキャリア・カウンセラーが、GSE の低い職業不決断学生のキャリア・プランニング・プロセス探索援助の間、GSE の増加に焦点を当てることを提案している。

### GSE の変化に焦点を当てた研究

領域固有の自己効力感の研究においては、自己効力感が制御 (成功) 体験、代理体験、社会的 (言語的) 説得、生理的・感情の状態を情報源としているため、それら进行操作することによって自己効力感が上昇することを実証してきた (Bandura 重久訳 1985; Bandura, 1997; Maddux, 2001; 坂野・前田, 2002)。ある領域における自己効力感が増加すると、それに似た領域の自己効力感も上昇する (Bandura, Adams, Hardy, & Howells, 1980; Brody, Hatfield, & Spalding, 1988)、さらには言語的課題についての自己効力感が増加すれば数学的課題についての自己効力感も上昇する (Hackett, Betz, O'Halloran, & Romac, 1990) というように、類似性の低い領域への般化も実証されている。また般化には課題の重要度の認知も重要な役割を果たしている (蓑内, 1993) という指摘もある。さらに Speight, Rosenthal, Jones, & Gastenveld (1995) は、医学的職業自己効力感が医療実習によってどのように影響されるかを検討した結果、医学的職業自己効力感尺度の三つの下位尺度すべてにおいて医療実習の後の方が前よりも有意に得点が高く、医療実習によって医療実習に関する領域だけでなく、ライフスタイルや学習習慣に関する自己効力感までもが上昇することを示した。

領域固有の自己効力感の上昇だけでなく、一般的に自己効力感を高く認知する傾向・低く認知する傾向である GSE を上昇させることは可能なのだろうか。坂野 (1989) は、治療により、うつ病から回復するにしたがって GSE の得点が増加する傾向を明らかにした。また Smith (1989) は、テスト不安をもつ大学生を対象として認知行動コーピング・スキル・トレーニングを実施し、その効果を検討した。その結果、統制群に比べてトレーニングを受けた実験群は、テスト不安管理や成績に関する領域固有の自己効力感が増加しただけでなく、テスト不安においても有意な減少を示し、学業成績もより高い水準にあった。さらにトレーニングを受けた実験群は、一般的な特性不安の減少や GSE の上昇も示した。他にも、深刻で持続性のある精神的な病気をかかえた外来患者を対象としてアウトドア・アドベンチャー・プログラムを実施し、GSE が増加することを示した研究 (Kelley, Coursey, & Selby, 1997)、宿泊型の多活動コースに参加した脊髄損傷者を対象として、コースの前に比べて後の GSE

が有意に高いことを示した研究 (Kennedy, Taylor, & Hindson, 2006), 失調 (ataxia) の子どもの親を対象にトレーニング・サポート・プログラムを実施し、プログラムによって GSE が増加することを示した研究 (Barlow, Cullen-Powell, & Williams, 2007) などがある。このようにしていったん上昇した GSE がどの程度の持続性をもつのかはまだ明らかにされていないが、治療的なプログラムによって GSE が上昇することはすでに実証されてきたといえよう。さらに、治療的なプログラムでなくとも、保育専攻短大生の保育者効力感が教育実習によって有意に上昇し、GSE も有意に上昇したことを示した研究もある (三木・桜井, 1998)。

しかしながらその一方で、ネガティブな出来事や失敗経験によっても GSE が低下しないことを示した研究も存在している。Jerusalem & Mittag (1995 山本訳 1997) は、東ドイツから西ドイツへ移住した 235 名のうち、専業主婦や学生を除く 124 名を対象として、1989—1991 年に 3 回にわたって縦断的な調査を実施した。その結果、GSE は安定しており、雇用状態やパートナーの有無、性差によって影響を受けないことが明らかになった。この研究は、よりよい生活を求めて移住した人を対象としているため、最終的な成功への可能性を信じる傾向が強いという可能性も指摘されているが、GSE にはストレスフルな環境の条件からのネガティブな影響を緩和する働きがあることも考えられよう。また GSE が思春期や青年期までに形成され、後の環境的な影響には左右されない可能性も示唆されている。さらに O'Rourke & Hampson (1999) は、心筋梗塞後の 6 か月間にわたるリハビリテーションにおいて、GSE が変化しないことを示している。また三宅 (2000) は、GSE の得点の変化そのものについては検討していないものの、GSE の高い人はネガティブ・フィードバック情報を与えられても、それが領域固有の自己効力感 (予測される課題遂行量に基づいて絶対的に評定される) や課題遂行量を低下させないことを実験によって示した。

社会的学習理論では、制御 (成功) 体験、代理体験、社会的 (言語的) 説得、生理的・感情的状態によって領域固有の自己効力感が変化し、その変化が GSE に影響し続けると考える (坂野, 2002; Sherer et al., 1982)。この考え方が正しければ、失敗の経験やネガティブなフィードバックにより領域固有の自己効力感は低下し、それに伴って GSE も低下すると考えられる。しかし上述した研究のように GSE は安定しており変化しないことが示唆されている (Jerusalem & Mittag, 1995 山本訳 1997; O'Rourke & Hampson, 1999)。

このように GSE の変化については、介入によって変化するという立場と変化しないという立場が存在し

ている。変化するという立場では、領域固有の自己効力感の変化が GSE に影響を与えるという一方向からのみ検討している (三木・桜井, 1998)。逆に、変化しないという立場では、ネガティブなフィードバックを与えても GSE の得点変化については検討せず、当初の群分けのまま GSE 高群・低群として扱い続けている (三宅, 2000)。

このようなことが起こるのは、GSE 研究において“領域固有の自己効力感が GSE を規定している”とする知見と、“GSE が領域固有の自己効力感を規定している”とする知見とが併存しており、暗黙に研究者はどちらかの知見に立っているからではないだろうか。“領域固有の自己効力感が GSE を規定している”とする知見は、例えば“一般性セルフ・エフィカシー (GSE) は、いわゆる task-specific なセルフ・エフィカシーが般化したものである” (坂野, 2002, p. 80), あるいは GSE は過去の成功と失敗の経験から形成される (Sherer et al., 1982) という般化をベースにした考え方である。一方、“GSE が領域固有の自己効力感を規定している”とする知見は、“ある特定の行動遂行場面では、当該の行動に対する task-specific な self-efficacy の高さが重要な要因となっていることは明らかであるが、それには、その個人のより一般的な self-efficacy (GSE) のレベルが大きな影響をもたらしていると思われる” (坂野・東條, 1986, p. 80) というように、比較的安定している GSE が情報源となって領域固有の自己効力感に影響しているとする考え方である。

つまり GSE の変化についての研究は、GSE がいつ頃形成され、安定するのかという発達的变化という視点と、“領域固有の自己効力感が GSE を規定している”のか、それとも“GSE が領域固有の自己効力感を規定している”のかという因果性の問題を整理して研究をデザインすることが重要だと考えられる。

### GSE の形成過程に焦点を当てた研究

GSE の形成過程についての研究はまだほとんど行われていない。それは、もともと領域固有の自己効力感の研究が、人間の行動をいかに的確に予測するかということを示すことに焦点を当ててきたことと関連していると考えられる。つまり GSE においても、先に述べたように GSE が人間の行動や情緒をいかに的確に予測することができるかということが研究の中心なのである。では GSE の個人差は、一体何によって説明されるのだろうか。この問いに対して、GSE の形成過程についての研究は重要な知見を与えてくれる可能性がある。ちなみに領域固有の自己効力感の発達に関してはすでに、Bandura (1997) が人間の全生涯にわたる広範な領域においてまとめている。

しかしながら GSE の形成過程についての研究はほ



とんど行われてこなかった。GSE がどのようにして形成されるのかということ、過去の成功と失敗の経験から形成される (Sherer et al., 1982) という見解があるだけである。しかしこれだけでは“GSE の変化に焦点を当てた研究”で挙げたような、治療的なプログラムや自我関与的な経験によって GSE が上昇する (Barlow et al., 2007; Kelley et al., 1997; Kennedy et al., 2006; 坂野, 1989; 三木・桜井, 1998; Smith, 1989) といった短期的な形成過程についての検討は可能となっても、より長期的な見通しをもった包括的な検討は不可能である。

Hoeltje, Zubrick, Silburn, & Garton (1996) は、GSE の形成過程に関する研究の第一歩として、Perth 在住の無作為に選ばれた 12—16 歳の子ども 112 名を対象に調査を行い、GSE と家族の養育態度や適応の指標との関連を検討した。その結果、GSE は養育的な親の態度 (nurturance) と正の相関、拒否的な親の態度 (rejection) とは負の相関、親子間の言い争いとは負の相関、精神的健康疾患とは負の相関、学業成績とは正の相関があることを明らかにした。一方、GSE との関連が認められなかったのは、親が評価した家族機能、親の子どもに対する報酬の使用、親の GSE、対人的な問題だった。このように現象記述的に GSE と育児態度や親子関係との関連を検討するだけでは、これらの現象の背後にある一貫した心理力動を理解することが難しく、研究が行き詰まってしまう。実際、GSE の形成過程に関する研究は Hoeltje et al. (1996) 以降、発表されていない。

ここでは、GSE の形成過程を解明するための研究ではないが、GSE の形成過程を検討する上で参考になる研究を紹介する。Blatny, Jelinek, & Osecka (2007) は、子どもの時に縦断研究に参加し、大人のフォローアップ研究に同意した 38—44 歳の 83 名を対象として、子どもの頃の気質が 40 年後のパーソナリティを予測するかどうかを検討した。子どもの頃の気質は、12—30 ヶ月の子どもを調査者が観察し評定した尺度によって測定されており、ポジティブな感情性 (positive affectivity: ポジティブな社会的反応やポジティブな情緒的表現など)、脱抑制 (disinhibition: ものや対象に対する攻撃性や一般的な活動性と調和・服従 (逆転)、一般的な反応性)、ネガティブな感情性 (negative affectivity: ネガティブな社会的反応やネガティブな情緒的表現など) という 3 因子構造だった。そしてこれら三つの因子の中で大人になってからのパーソナリティと関連があったのは脱抑制のみで、GSE との相関は  $r = .341$  ( $p < .01$ ) だった。

この結果から、Blatny et al. (2007) は GSE の個人差が経験によってではなく、乳幼児期の気質 (temperament) によって決まると主張した。しかし GSE の個人差に経験は関係なく、生まれながらの気質にの

み依存していると言ってよいのだろうか。

そこで我々は、人格特性的な概念である GSE 研究の新たな可能性として、Erikson の人格発達理論、すなわち漸成発達理論を導入することによって、GSE の形成過程やそのメカニズムに関して新たな仮説が提出できるのではないかという可能性を検討した。社会的学習理論に基づいた膨大な実証的研究を有する領域固有の自己効力感に比べると、まだ始まったばかりといえる GSE 研究に対して、生涯発達論や精神分析的な人格理論の視点を取り込むことにより GSE 研究のさらなる発展を目指す試みである。

### GSE 研究の今後の展開として GSE 研究に 漸成発達理論を導入する試み

#### 生涯発達の視点

森本 (2000) は、GSE 研究に Hartmann や Erikson らに代表される自我心理学の中の自我発達という概念を取り入れることを提案し、GSE の形成過程は健康な自我発達によって説明できるのではないかと指摘している。自我心理学とは超自我やエスから独立した自律的自我 (autonomous ego)、すなわち葛藤から自由な自我の領域 (conflict-free ego sphere) を仮定し、自我独自の力を強調するものである。中でも Erikson の漸成発達理論は、Hartmann, H. の自律的自我発達の観点に基礎を置き、Freud, S. の心理-性的-漸成発達論 (psycho-sexual-epigenetic theory) を、自我の漸成的発達 (ego-epigenesis) の理論へと発展させたものである。Erikson は人間を精神-身体的、対人関係的、社会・文化的、歴史的な多次元的存在としてとらえ、自我をその統合の主体と考える (小此木, 2002)。そして Erikson の漸成発達理論は、ライフ・サイクル (life cycle) というキーワードが示しているように、人間の生涯全体を包含した生涯発達の観点を提示している。

Erikson (1950 仁科訳 1977, 1980) は人間の生涯発達を八つの心理社会的発達段階にわけ、各段階において自我が重要な関係 (第 I 段階から順に、母親的人物、親的人物、基本家族、近隣・学校、仲間集団・外集団、友情・性愛などにおけるパートナー、労働と家庭、人類・種族) との出会いを経験することによって葛藤、すなわち危機 (“一層傷つき易くそれだけに潜在的能力が拡大する重要な時期” (Erikson, 1968 岩瀬訳 1982, p. 119) である転換点を意味する) が生じることを指摘した。そしてそれを漸成発達理論図 (epigenetic diagram) (Erikson, 1959 小此木訳 1973) の対角線上にある基本的信頼感对基本的不信感 (basic trust vs mistrust)、自律性对恥・疑惑 (autonomy vs shame, doubt)、主導性对罪悪感 (initiative vs guilt)、生産性对劣等感 (industry vs inferiority)、アイデンテ

ィティ確立対アイデンティティ拡散 (identity vs identity diffusion), 親密性対孤立 (intimacy vs isolation), 生殖性対自己吸収・停滞 (generativity vs self-absorption, stagnation), 統合性対嫌悪・絶望 (integrity vs disgust, despair) として表現している。各段階の葛藤 (危機) は、例えば基本的信頼感が基本的不信感を上回るバランスで解決することによって活力 (virtue) が生まれるという意味で、主題 (theme) と呼ばれている。各段階の主題をポジティブなバランスで解決することによって、次の段階の主題に取り組む準備が整い、よりスムーズに次の段階の主題を解決することができる。このように漸成発達理論図は、それぞれの発達段階が、織物の縦糸のように永続性をもって、後の発達段階に影響し続けることを示している。

このように Erikson は人間の一生涯を八つの段階にわけ、各段階における危機とその解決様式を示したが、漸成発達理論を GSE 研究に取り入れることによって、GSE の形成過程について長期的な見通しをもった包括的な検討が可能になると考えられる。GSE は過去の成功と失敗の経験から形成される (Sherer et al., 1982) という手がかりだけではあまりにも茫漠としているが、Erikson の漸成発達理論図には GSE に関連する発達の順序と要因に関する手がかりが数多く存在している。

例えば第 I 段階では、“他人に関しては一般に筋の通った信頼 reasonable trustfulness” (Erikson, 1959 小此木訳 1973, p. 61), “自分自身に関しては信頼に値する trustworthiness という単純な感覚” (Erikson, 1959 小此木訳 1973, p. 61) をもたらすような母親の人物との相互調整を通じて、基本的信頼感という主題が解決され、青年期にはそれが時間的展望として現れると Erikson は述べている。つまり基本的信頼感の高い人は自分に対する信頼という意味で、GSE も高いと考えられる。しかもそれは、発達の第 I 段階から将来に対しても永続的なものとなり、第 I 段階以降の危機の解決にもポジティブに影響すると Erikson は説明している。

また Erikson は、学童期に相当する第 IV 段階生産性対劣等感において、物を生産することによって周囲の承認を獲得することを学び、生産性の観念が発達し (Erikson, 1950 仁科訳 1977, p. 333), 青年期にはその葛藤が達成の期待 (anticipation of achievement)・仕事見習い (apprenticeship) 対労働麻痺 (work paralysis) として現れると述べている。Erikson は労働麻痺について“自分の全体的な能力に関する (基本的な不信感に退行した) 深刻な不適合感の論理的な帰結である” (Erikson, 1959 小此木訳 1973, p. 191) と定義し、それがいつも本当の潜在力の欠如を反映しているとは限らないと述べている。つまり青年の GSE は、まさに第 IV 段階の葛藤の青年期での現れである達成の

期待とほぼ同義と解釈してよいのではないだろうか。さらに第 IV 段階の主題の解決には、近隣・学校という重要な関係との出会いの他に、それ以前の発達段階における主題の解決程度が影響していることが示唆されている (Erikson, 1950 仁科訳 1977)。

しかしながらこのような理論上のメカニズムを、実際にデータに基づいて検証するにはどうしたらよいのだろうか。Erikson の概念は、操作的な定義が難しい (Maddi, 1980), 記述が不明確 (Waterman, 1982), 雲をつかむような概念でわかりにくい (Simmons, 1970), 複雑で曖昧で重複している (Rosenthal, Gurney, & Moore, 1981) といった批判もある。実際に、第 V 段階のアイデンティティに関する研究のデータは蓄積されつつあるが、その他の段階についてはまだ自己効力感研究ほどの実証的データの蓄積がない。しかし Erikson は、人格の各発達段階における成長や危機を、基本的信頼対不信というような一連の対極にある主題として述べる際に、“——の感覚” (a sense of —) という言葉を用いている。この“——の感覚”とは、表層と深層、意識と無意識の双方にまたがっており、“内省 (introspection) によって近づきうる意識的な‘経験’の仕方であり、他人にも観察可能な‘行動’の仕方であり、テストや分析方法によって実証可能な無意識的な内的状態である” (Erikson, 1959 小此木訳 1973, pp. 61-62)。そして“論を進めるにあたって、つねにこれらの三つの次元を念頭におくことが必要である” (Erikson, 1959 小此木訳 1973, p. 62) と指摘している。

したがって今後は、漸成発達理論を枠組みとして、意識的な経験の仕方、行動の仕方、無意識的な内的状態という三つの次元からのアプローチを組み合わせることによって、GSE の形成過程についての総合的な検討が可能になると考える。例えば発達の初期の段階に焦点を当て、対象となる子どもにとって重要な関係である母親の存在・親的存在とのやりとりを観察する場合も、相互調整的な関係であるかどうか、親的存在が支配的か否かといった観察の着眼点についての手がかりが得られる。また、形成過程を明らかにするためには縦断研究も不可欠だと考えられるが、対象となった子どもたちが学童期になると、意識的な経験の仕方についてもある程度の内省が可能になり、重要な関係である近隣・学校において観察と組み合わせて面接や質問紙調査によっても生産性や劣等感の感覚を検討することが可能になる。さらにすでに亡くなった方の生涯をふまえた上で GSE の高い人を選出し、伝記資料により、どのような要因によって GSE が高く形成されるのかを明らかにしようとする伝記研究 (大野, 2008) も有効であろう。

さらに Ochse & Plug (1986) は、意識的な経験の仕方、行動の仕方、無意識的な内的状態を念頭に置いた



上で、“——の感覚”という観点から漸成発達理論の各発達段階の主題の解決程度を測定する尺度を作成している。この尺度に関しては、三好・大野・内島・若原・大野（2003）によって各段階を7項目にそろえた日本語短縮版が作成されている。尺度は十分な信頼性と妥当性を示しており、青年期以降を対象とした利用が期待される。

### 活力という概念の可能性

先に各段階の葛藤（危機）は、例えば基本的信頼感が基本的不信感を上回るバランスで解決することによって活力（virtue）が生まれると述べたが、この人格的活力についても詳しく述べたい。Erikson は内在的な固有の強さ、人格的強さを活力（virtue）と呼び、漸成発達理論の八つの発達段階に対応させて八つの活力（希望（hope）、意志力（will）、目的性（purpose）、有能感（competence）、忠誠（fidelity）、愛（love）、世話（care）、英知（wisdom））を挙げている。活力とは健康な自我発達によって生成され、人間の生活を生き生きとさせる人格の統合された性質だと考えられる。

第Ⅳ段階の活力である有能感について Erikson は“重要な課題の達成において、機敏さや知性を自由に駆使する能力”（Erikson, 1968 岩瀬訳 1982, p. 163）と定義し、“生産的な成人生活への協調的な参加によって、恒久的な基礎となるもの”（Erikson, 1968 岩瀬訳 1982, p. 163）と述べている。そして有能感がないと人間は“自分の能力に、劣等感をもち、次第に増大していく現実の処理に、見合うだけの能力が自分の中にはないのではないかと疑うようになる”（Erikson, 1964 鑑訳 1971, p. 120）と指摘している。このように、第Ⅳ段階の活力である有能感の概念は、ある行動を自らが成功裏に実行できるという確信を様々な場面で全般的にもちやすいか否かという GSE の概念に関連していると考えられる。第Ⅳ段階の生産性対劣等感の葛藤を生産性が優位なバランスで解決し、活力である有能感を獲得した人間は、青年期においても達成の期待をもちやすく、GSE が高いのではないだろうか。

先に示した Erikson の漸成発達理論図は、それぞれの発達段階がより高次の発達段階の基盤になることを示していることから、第Ⅳ段階以前の活力、すなわち第Ⅰ段階の希望、第Ⅱ段階の意志力、第Ⅲ段階の目的性の生成も第Ⅳ段階の活力である有能感の生成にかかわってくる。第Ⅰ段階の活力である希望とは、“主要な願望は達成可能であるということを信じる永続的な先有傾向のこと”（Erikson, 1968 岩瀬訳 1982, p. 134）、“求めるものが得られるという確固とした信念”（Erikson, 1964 鑑訳 1971, p. 113）、意志力とは“自分自身の未来を選択し、指導できるような独立した個人であり続けるという勇気”（Erikson, 1968 岩瀬

訳 1982, p. 146）、目的性とは“価値ある目的を心に描き、実際に追求する勇気”（Erikson, 1964 鑑訳 1971, p. 118）のことである。いずれも有能感の基盤になっており、GSE の形成過程の解明にとって重要な役割を果たすと考えられる。

このように活力の定義を整理していくと、GSE 研究が目指してきたところは、Erikson の活力研究だったともいえるのではないだろうか。事実、Sherer et al. (1982) の作成した特性的自己効力感尺度（Generalized Self-Efficacy Scale）の項目は、行動を起こす意志、行動を完了しようと努力する意志、逆境における忍耐など活力と関連する内容から構成されている。また Tipton & Worthington (1984) の開発した Generalized Self-Efficacy Scale も、“身体的、あるいは情緒的な逆境に直面した際に、それを引き受け、粘り強く取り組もうとする意志と決定に関した項目”（Tipton & Worthington, 1984, p. 546）によって構成されている。そして何より Maddux (2001) は 20 年以上にわたる自己効力感研究を要約し、“自信、努力、粘り強さは先天的な才能よりもずっと強力だというサンプルでパワフルな真実が、自己効力感研究の永久のメッセージである”（Maddux, 2001, p. 285）と述べている。自己効力感が高ければ自信があり粘り強く努力し、そのことが才能よりも結果を強く予測するという意味である。このような文脈でも、自己効力感はまさに、希望（hope）、意志力（will）、目的性（purpose）の上に生成される有能感（competence）として、活力と同義に用いられている。

したがって今後の GSE 研究には、生涯発達を視野に入れた、より広い概念である Erikson の有能感の概念を導入し、利用する価値があるのではないだろうか。社会的学習理論に基づいた領域固有の自己効力感という概念から人格特性的な自己効力感（GSE）へと概念を広げた時点で、生涯発達論や精神分析の人格理論を考慮すべきだったと考えられる（三好, 2007）。そして GSE の形成過程についての研究を進めていく上では特に、健康な自我発達という観点から有能感の概念を導入することにより、理論的枠組みを基盤として、より一層の深みと広がりのある展開が期待できるのではないだろうか。

### 現象記述的な GSE 研究に時間軸と心理力動性を付与する理論的枠組み

GSE 研究は人格特性的な概念についての研究であるにもかかわらず、分析単位の小さい、実証的で現象記述的な研究が多く、それらの現象の背後にある心理力動については検討されてこなかった。しかしそこに Erikson の漸成発達理論を導入すると、理論的な枠組みとなり、時間軸を含めた心理力動的な解釈が可能になると考えられる。

先述したように Hoeltje et al. (1996) による GSE の形成過程に関する研究では、GSE が養護的な親の態度 (nurturance)、学業成績とは正の相関があり、拒否的な親の態度 (rejection)、親子間の言い争い、精神的健康疾患とは負の相関のあることが明らかにされている。そして GSE と親が評価した家族機能、親の子どもに対する報酬の使用、親の GSE、対人的な問題とは無相関であることが示された。この結果を Erikson の漸成発達理論に沿って解釈すると、物理的な報酬の有無にかかわらず、養護的で拒否的でない親の養育態度は子どもの基本的信頼感を育み、後の発達段階における主題の解決にもポジティブな影響を及ぼし、精神的健康と安定した環境のもとで学業にも打ち込むことができると考えられる。その結果、GSE が高く形成される。一方、養護的でなく拒否的な親の養育態度は子どもの基本的不信感を強め、後の発達段階における主題の解決にもネガティブな影響を及ぼし、精神的に不健康で学業にも身が入らず、GSE も低く形成されるのではないだろうか。さらに支配的・専制的で過干渉な親は、子どもの自律性や主導性にもネガティブな影響を及ぼし、GSE を低め、思春期を迎えた子どもとの言い争いが絶えないと推測される。

また、子どもの頃の気質が 40 年後のパーソナリティを予測するかどうかを検討した Blatny et al. (2007) の研究結果についても、12—30 か月の子どもの気質を先天的な気質としてとらえるのではなく、第 I 段階の活力である希望や第 II 段階の意志力を反映していると解釈することが妥当なのではないだろうか。第 I 段階の希望、すなわち“求めるものが得られるという確固とした信念”(Erikson, 1964 鑑訳 1971, p. 113) を基盤として、“自分自身の未来を選択し、指導できるような独立した個人であり続けるという勇気”(Erikson, 1968 岩瀬訳 1982, p. 146) をもつ意志力の強い子どもは、元気が良く意地っ張りであり、ものや対象に対する攻撃性や活動性、反応性が高く、調和・服従性が低いという脱制止 (disinhibition) 的な傾向をもっているのではないだろうか。脱制止が希望や意志力の反映だとすると、約 1—3 歳の頃の脱制止と 40 年後の GSE との関連には説得力がある。

さらに治療的なプログラムによって GSE が上昇することを示した研究 (Barlow et al., 2007; Kelley et al., 1997; Kennedy et al., 2006; 坂野, 1989; Smith, 1989) についても、失っていた活力を治療によって取り戻したと解釈することができるのではないだろうか。Erikson (1964 鑑訳 1971) は治療における本質的な変化・回復を活力の増大であると述べ、単なる症状の消失とは明確に区別している。

このように GSE 研究に漸成発達理論を導入することによって、これまでの現象記述的に点在していた研究結果について、人格発達という時間軸を含めた心理

力動的な解釈が可能になる。今後の研究においても、漸成発達理論の時間軸による順序性の手がかりによって、理論的な仮説を立て、効率よくそれを実証することができるのではないだろうか。

### GSE のネガティブな側面についての研究の限界と可能性

自己効力感の理論 (Bandura, 1977a) はそもそも期待の理論である。実際に何もかもうまくいっており、この調子で今後もうまくやっていけるだろうと思っている場合も、失敗や挫折の連続という長い不遇の経験にもかかわらず自分の力を信じ続けているという場合も、特別に何か行動を起こしているわけではないが自分にできないことなどあるべきでないと思っている場合も、一様に自己効力感が高く評定され得るのである。したがってある行動を自らが成功裏に実行できるという確信を様々な場面で全般的にもちやすいか否かという GSE の概念も、本来完全に主観的なものであるため、厳密には誇大妄想と区別できない要素があることは否定できない。

誇大妄想までいかなくとも、例えば Erikson は第 IV 段階の劣等感の青年期での現れである労働麻痺について、いつも本当の能力の欠如を反映しているとは限らないとし、“全能や全知をひたすら確立しようとする自我理念からの非現実的な要求を伝えている場合”(Erikson, 1959 小此木訳 1973, p. 191) があると述べている。Adler も“神のようになりたい”(Adler, 1931 高尾訳 1984, p. 69) という目標が、“独特に強い優越目標”(Adler, 1931 高尾訳 1984, p. 70) であり危険だと述べているし、Horney もまた、神経症的人間は想像力を用いて理想化された自己像を作り上げ、理想化され統合された自己像に己自身を同一視するとし、“理想化された自己を現実化しようとする諸欲動のうちで、完璧さへの欲求はもっとも根本的なものである。その目標は、パーソナリティ全体を理想化された自己に作りかえようとすることにほかならない”(Horney, 1950 榎本・丹治訳 1998, p. 11) と説明している。すなわち、“全能や全知を確立しようとする要求”、“神のようになりたいという目標”、“完璧さへの欲求”という極端な要求水準の高さによって、自分にできないことなどあるべきでないと GSE を高く評定する人がいる可能性のあること、そしてそれらの人は精神的には不健康な状態であることが予測される。

しかしながら GSE のネガティブな特徴について検討した研究は少なく、成果もあがっていない。Burke, Matthiesen, & Pallesen (2006) は、パーソナリティとワーカホリズムとの関連を検討した結果、GSE とワーカホリズムに正の相関のあることを明らかにした。しかしながらそれは、ワーカホリズムを構成している

三つの因子のうち、自分の仕事は仕事というよりもむしろ楽しみだというような、“仕事における喜び (joy in work)” 因子との相関 ( $r=.27, p<.001$ ) で、ワーカホリズムの中核的な概念であると考えられるような、仕事をしていないと退屈だとか落ち着かないという“仕事依存 (work involvement)” 因子や、“仕事に取りつかれた感じ (feeling driven)” 因子と GSE とは無相関だった。

また Hart, Gilner, Handal, & Gfeller (1998) は、完全主義と GSE との関連を検討した。その結果、完全主義と GSE との間に相関はなかったが、完全主義を構成している三つの下位尺度ごとに検討してみると、自分に対する完全主義と GSE との間には負の相関 ( $r=-.27, p<.01$ )、他人に対する完全主義と GSE との間にも負の相関 ( $r=-.22, p<.01$ ) があるのに対して、重要な他者が自分にとって非現実的な基準を持ち、完全であるように厳しく評価し圧力をかけているという信念 (社会的に命令された完全主義) は GSE と正の相関 ( $r=.27, p<.01$ ) がみられた。

このように GSE のネガティブな側面については明確な結果が得られていない。しかし、ここで Erikson の漸成発達理論を枠組みとすることによって、例えば発達の第 I 段階である基本的信頼感を統制した上で GSE と精神的健康との関連を検討することも可能になる。三好 (2007) は、精神的健康の変動の約 31.4 % を基本的信頼感が説明しているのに対して、GSE によって説明される変動はほとんどないことを明らかにしている。さらに、いくら GSE が高くとも基本的信頼感が基盤になれば、抑うつ、倦怠、敵意、活動的快という感情状態において相対的にネガティブであり、GSE が高いだけでは精神的に健康であるとは言えないことも明らかにされた (三好, 2007)。

同様にして基本的信頼感を統制した上で GSE とワーカホリズム、完全主義との関係を検討することも可能であろう。GSE の高い人であっても、基本的信頼感が高いとは限らない。GSE と基本的信頼感とはもちろん相関はあるが、GSE が高くとも基本的信頼感の低い人は存在していると考えられる。そのような人は、“全能や全知を確立しようとする要求”、“神のようになりたいという目標”、“完璧さへの欲求” という極端な要求水準の高さをもっており、ワーカホリズムや完全主義傾向が高いのではないだろうか。さらに“自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚”と定義される仮想的有能感 (速水・木野・高木, 2004) や、誇大性という意味では自己愛的障害との関係に応用していくことも可能になると考えられる。基本的信頼感の程度が同じであれば、GSE が高いほど仮想的有能感が高く、自己愛的障害傾向も高いという可能性がある。関連して三好

(2008) は、初期の人格発達 (基本的信頼感・自律性・主導性) の程度が同じであれば、養育環境が悪いほど GSE が高く、GSE が高いほど敵意も高いことを明らかにしている。

一方で先に述べたように、GSE は自尊心の高さ、内的統制型、情緒的安定性の高さとして示される“コアな自己評価 (core self-evaluations)” として扱われたり (Judge et al., 2002, 2003; Piccolo et al., 2005)、ウェルネスをもたらす四つの心理的資源としてポジティブな思考 (positive thoughts)・ハーディネス (hardiness)・楽観主義と同列に論じられたり (Lightsey, 1996)、楽観主義を構成する一側面として扱われたりしている (Fournier, de Ridder, & Bensing, 1999)。本来、ポジティブ・ネガティブの両側面をもつ GSE について、ポジティブな類似概念と並べて検討することが、GSE の本質的な特徴をかえって曖昧にしてしまっているのではないだろうか。

今後は、GSE のポジティブな側面だけでなく、極端な要求水準の高さなどによるネガティブな側面にも焦点を当てた研究が望まれる。そのためには、人格発達理論なしでの GSE 研究には限界があるのではなだろうか。本論文で取り上げたように精神分析の人格発達理論の包括的な枠組みを利用し、GSE についての複雑なメカニズムについて仮説を立て、GSE との関連概念を選定し検討することに重要な意義があると考えられる。

## 文 献

- Adler, A. (1931). *What life should mean to you*. Boston: Little & Brown.  
 (アドラー, A. 高尾 利数 (訳) (1984). 人生の意味の心理学 春秋社)  
 Argyropoulou, E.P., Sidiropoulou-Dimakakou, D., & Besevegis, E.G. (2007). Generalized self-efficacy, coping, career indecision, and vocational choices of senior high school students in Greece: Implications for career guidance practitioners. *Journal of Career Development*, 33, 316-337.  
 Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.  
 Bandura, A. 重久 剛 (訳) (1985). 自己効力 (セルフ・エフィカシー) の探究 祐宗 省三・原野 広太郎・柏木 恵子・春木 豊 (編) 社会的学習理論の新展開 金子書房 pp. 103-141.  
 Bandura, A. (Ed.) (1995). *Self-efficacy in changing societies*. New York: Cambridge University Press.  
 (バンデューラ, A. (編) 本明 寛・野口 京子 (監訳) (1997). 激動社会の中の自己効力 金子書房)  
 Bandura, A. (1997). *Self-efficacy: The exercise of control*. New York: W.H. Freeman and Company.



- Bandura, A., Adams, N.E., Hardy, A.B., & Howells, G.N. (1980). Tests of the generality of self-efficacy theory. *Cognitive Therapy and Research*, **4**, 39-66.
- Barlow, J.H., Cullen-Powell, L.A., & Williams, H. (2007). The training & support programme for parents of children with ataxia: A pilot study. *Psychology, Health & Medicine*, **12**, 64-69.
- Betz, N.E., Borgen, F.H., & Harmon, L. (1996). *Skills confidence inventory applications and technical guide*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.
- Blatny, M., Jelinek, M., & Osecka, T. (2007). Assertive toddler, self-efficacious adult: Child temperament predicts personality over forty years. *Personality and Individual Differences*, **43**, 2127-2136.
- Boer, H., Elving, W.J.L., & Seydel, E.R. (1998). Psychosocial factors and mental health in cancer patients: Opportunities for health promotion. *Psychology, Health and Medicine*, **3**, 71-79.
- Brody, E.B., Hatfield, B.D., & Spalding, T.W. (1988). Generalization of self-efficacy to a continuum of stressors upon mastery of a high-risk sport skill. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, **10**, 32-44.
- Burke, R.J., Matthiesen, S.B., & Pallesen, S. (2006). Personality correlates of workaholism. *Personality and Individual Differences*, **40**, 1223-1233.
- Cowen, E.L., Work, W.C., Hightower, A.D., Wyman, P.A., Parker, G.R., & Lotyczewski, B.S. (1991). Toward the development of a measure of perceived self-efficacy in children. *Journal of Clinical Child Psychology*, **20**, 169-178.
- Davis-Berman, J. (1988). Self-efficacy and depressive symptomatology in older adults: An exploratory study. *International Journal of Aging and Human Development*, **27**, 35-43.
- Dweck, C.S. (2000). *Self-theories: Their role in motivation, personality, and development*. Philadelphia: Psychology Press.
- Ehrenberg, M.F., Cox, D.N., & Koopman, R.F. (1991). The relationship between self-efficacy and depression in adolescents. *Adolescence*, **26**, 361-374.
- Erez, A., & Judge, T.A. (2001). Relationship of core self-evaluations to goal setting, motivation, and performance. *Journal of Applied Psychology*, **86**, 1270-1279.
- Erikson, E.H. (1950). *Childhood and society*. New York: Norton.
- (エリクソン, E.H. 仁科 弥生 (訳) (1977, 1980). 幼児期と社会 1, 2 みすず書房)
- Erikson, E.H. (1959). *Identity and life cycle*. New York: International Universities Press.
- (エリクソン, E.H. 小此木 啓吾 (訳編) (1973). 自我同一性 誠信書房)
- Erikson, E.H. (1964). *Insight and responsibility*. New York: Norton.
- (エリクソン, E.H. 鑑 幹八郎 (訳) (1971). 洞察と責任 誠信書房)
- Erikson, E.H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York: Norton.
- (エリクソン, E.H. 岩瀬 庸理 (訳) (1982). アイデンティティ 金沢文庫)
- Fournier, M., de Ridder, D., & Bensing, J. (1999). Optimism and adaptation to multiple sclerosis: What does optimism mean? *Journal of Behavioral Medicine*, **22**, 303-326.
- Gillespie, A., Peltzer, K., & MacLachlan, M. (2000). Returning refugees: Psychosocial problems and mediators of mental health among Malawian returnees. *Journal of Mental Health*, **9**, 165-178.
- Hackett, G. (1995). Self-efficacy in career choice and development. In A. Bandura (Ed.), *Self-efficacy in changing societies*. New York: Cambridge University Press. pp. 232-258.
- (ハケット, G. 本明 寛 (訳) (1997). 職業選択と発達における自己効力 パンデューラ, A. (編) 本明 寛・野口 京子 (監訳) 激動社会の中の自己効力 金子書房 pp. 205-229.)
- Hackett, G., & Betz, N.E. (1981). A self-efficacy approach to the career development of women. *Journal of Vocational Behavior*, **18**, 326-339.
- Hackett, G., Betz, N.E., O'Halloran, M.S., & Romac, D.S. (1990). Effects of verbal and mathematics task performance on task and career self-efficacy and interest. *Journal of Counseling Psychology*, **37**, 169-177.
- Hart, B.A., Gilner, F.H., Handal, P.J., & Gfeller, J.D. (1998). The relationship between perfectionism and self-efficacy. *Personality and Individual Differences*, **24**, 109-113.
- 速水 敏彦・木野 和代・高木 邦子 (2004). 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **51**, 1-8.
- (Hayamizu, T., Kino, K., & Takagi, K. (2004). Examination on construct validity of assumed-competence scale. *Bulletin of Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University (Psychology and Human Development Sciences)*, **51**, 1-8.)
- 廣瀬 英子 (1998). 進路に関する自己効力研究の発展と課題 教育心理学研究, **46**, 343-355.
- (Hirose, E. (1998). A review of career self-efficacy studies. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **46**, 343-355.)
- Hoeltje, C.O., Zubrick, S.R., Silburn, S.R., & Garton, A.F. (1996). Generalized self-efficacy: Family and adjustment correlates. *Journal of Clinical Child Psychology*, **25**, 446-453.
- Holland, J.L. (1997). *Making vocational choices: A theory of vocational personalities and work environments*. 3rd ed. Odessa, FL: Psychological Assessment Resources.
- Horney, K. (1950). *Neurosis and human growth: The struggle toward self-realization*. New York: Norton.
- (ホーナイ, K. 榎本 譲・丹治 竜郎 (訳) (1998). 神経症と人間の成長 誠信書房)

- Jerusalem, M., & Mittag, W. (1995). Self-efficacy in stressful life transition. In A. Bandura (Ed.), *Self-efficacy in changing societies*. New York: Cambridge University Press. pp. 177-201.  
(イエルサレム, M.・ミッタグ, W. 山本 多喜司 (訳) (1997). ストレスフルな人生移行における自己効力 バンデューラ, A. (編) 本明 寛・野口京子 (監訳) 激動社会の中の自己効力 金子書房 pp. 154-178.)
- Judge, T.A., & Bono, J.E. (2001). Relationship of core self-evaluations traits-self-esteem, generalized self-efficacy, locus of control, and emotional stability-with job satisfaction and job performance: A meta-analysis. *Journal of Applied Psychology*, **86**, 80-92.
- Judge, T.A., Bono, J.E., & Locke, E.A. (2000). Personality and job satisfaction: The mediating role of job characteristics. *Journal of Applied Psychology*, **85**, 237-249.
- Judge, T.A., Erez, A., & Bono, J.E. (1998). The power of being positive: The relation between positive self-concept and job performance. *Human Performance*, **11**, 167-187.
- Judge, T.A., Erez, A., Bono, J.E., & Thoresen, C.J. (2002). Are measures of self-esteem, neuroticism, locus of control, and generalized self-efficacy indicators of a common core construct? *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 693-710.
- Judge, T.A., Erez, A., Bono, J.E., & Thoresen, C.J. (2003). The Core Self-Evaluations Scale: Development of a measure. *Personnel Psychology*, **56**, 303-331.
- Judge, T.A., Locke, E.A., Durham, C.C., & Kluger, A.N. (1998). Dispositional effects on job and life satisfaction: The role of core evaluations. *Journal of Applied Psychology*, **83**, 17-34.
- Kelley, M.P., Coursey, R.D., & Selby, P.M. (1997). Therapeutic adventures outdoors: A demonstration of benefits for people with mental illness. *Psychiatric Rehabilitation Journal*, **20**, 61-73.
- Kennedy, P., Taylor, N., & Hindson, L. (2006). A pilot investigation of a psychosocial activity course for people with spinal cord injuries. *Psychology, Health and Medicine*, **11**, 91-99.
- 久野 真由美・矢澤 久史・大平 英樹 (2003). 学習性無気力感の生起事態における特性的自己効力感と免疫機能の変動 心理学研究, **73**, 472-479.  
(Kuno, M., Yazawa, H., & Ohira, H. (2003). Learned helplessness, generalized self-efficacy, and immune function. *Japanese Journal of Psychology*, **73**, 472-479.)
- Lightsey, O.R., Jr. (1996). What leads to wellness? The role of psychological resources in well-being. *Counseling Psychologist*, **24**, 589-735.
- Lightsey, O.R., Jr. (1997). Stress buffers and dysphoria: A prospective study. *Journal of Cognitive Psychotherapy*, **11**, 263-277.
- Lightsey, O.R., Jr., & Christopher, J.C. (1997). Stress buffers and dysphoria in a non-western population. *Journal of Counseling and Development*, **75**, 451-459.
- Lindley, L.D., & Borgen, F.H. (2002). Generalized self-efficacy, Holland theme self-efficacy, and academic performance. *Journal of Career Assessment*, **10**, 301-314.
- Maddi, S.R. (1980). *Personality theories: A comparative analysis*. Homewood, IL: Dorsey Press.
- Maddux, J.E. (2001). Self-efficacy: The power of believing you can. In C.R. Snyder & S.J. Lopez (Eds.), *Handbook of positive psychology*. Oxford, England: Oxford University Press. pp. 277-287.
- McClenahan, R., & Weinman, J. (1998). Determinants of carer distress in nonacute stroke. *International Journal of Language and Communication Disorders*, **33**, 138-143.
- 三木 知子・桜井 茂男 (1998). 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響 教育心理学研究, **46**, 203-211.  
(Miki, T., & Sakurai, S. (1998). The effects of teaching practice in kindergarten and day care nursery on preschool teacher efficacy in the case of junior college students studying early childhood education. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **46**, 203-211.)
- Mikkelsen, E.G., & Einarsen, S. (2002). Relationships between exposure to bullying at work and psychological and psychosomatic health complaints: The role of state negative affectivity and generalized self-efficacy. *Scandinavian Journal of Psychology*, **43**, 397-405.
- 三村 隆男 (2004). キャリア教育入門——その理論と実践のために—— 実業之日本社  
(Mimura, T.)
- 蓑内 豊 (1993). 課題の重要度の認知が自己効力の般化に及ぼす影響 教育心理学研究, **41**, 57-63.  
(Minouchi, Y. (1993). The effect of perceived task importance on the generality of self-efficacy. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **41**, 57-63.)
- 三宅 幹子 (2000). 特性的自己効力感が課題固有の自己効力感の変容に与える影響——課題成績のフィードバック操作を用いて—— 教育心理学研究, **48**, 42-51.  
(Miyake, M. (2000). Relation of generalized self-efficacy to changes in task-specific self-efficacy. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **48**, 42-51.)
- 三好 昭子 (2003). 主観的な感覚としての人格特性的自己効力感尺度 (MSGSE) の開発 発達心理学研究, **14**, 172-179.  
(Miyoshi, A. (2003). Development of a generalized self-efficacy measure. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **14**, 172-179.)
- 三好 昭子 (2007). 人格特性的自己効力感と精神的健康との関連——漸成発達理論における基本的信頼感からの検討—— 青年心理学研究, **19**, 21-31.  
(Miyoshi, A. (2007). The relationship between generalized self-efficacy and mental health: Viewed

- in light of the concept of basic trust as expressed in epigenetic theory. *Japanese Journal of Adolescent Psychology*, **19**, 21-31.)
- 三好 昭子 (2008). 人格特性的自己効力感の形成に影響を及ぼす要因モデルの検討——理想化された自己における完璧さへの欲求との関係を含めて——日本心理学会第 72 回大会発表論文集, 52. (Miyoshi, A.)
- 三好 昭子・大野 久・内島 香絵・若原 まどか・大野 千里 (2003). Ochse & Plug の Erikson and Social-Desirability Scale の日本語短縮版 (S-ESDS) 作成の試み 立教大学心理学研究, **45**, 65-76. (Miyoshi, A., Ōno, H., Uchijima, K., Wakahara, M., & Ōno, C. (2003). The development of a simplified version of Ochse & Plug's Erikson and social-desirability scale (S-ESDS). *Rikkyo Psychological Research*, **45**, 65-76.)
- 森本 昭子 (2000). 特性的自己効力感と自我心理学における自我発達概念との関連 立教大学心理学研究, **42**, 75-82. (Morimoto, A. (2000). The relationship between generalized self-efficacy and the conception of ego development in ego psychology. *Rikkyo Psychological Research*, **42**, 75-82.)
- Murphy, H., & Murphy, E.K. (2006). Comparing quality of life using the World Health Organization Quality of Life measure (WHOQOL-100) in a clinical and non-clinical sample: Exploring the role of self-esteem, self-efficacy and social functioning. *Journal of Mental Health*, **15**, 289-300.
- 成田 健一・下仲 順子・中里 克治・河合 千恵子・佐藤 眞一・長田 由紀子 (1995). 特性的自己効力感尺度の検討: 生涯発達の利用の可能性を探る教育心理学研究, **43**, 306-314. (Narita, K., Shimonaka, Y., Nakazato, K., Kawaai, C., Sato, S., & Osada, Y. (1995). A Japanese version of the generalized self-efficacy scale: Scale utility from the life-span perspective. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **43**, 306-314.)
- Ochse, R., & Plug, C. (1986). Cross-cultural investigation of the validity of Erikson's theory of personality development. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 1240-1252.
- Oginska-Bulik, N. (2005). The role of personal and social resources in preventing adverse health outcomes in employees of uniformed professions. *International Journal of Occupational Medicine and Environmental Health*, **18**, 233-240.
- 小此木 啓吾 (2002). 現代の精神分析——フロイトからフロイト以後へ—— 講談社 (Okonogi, K.)
- Oliver, J.M., & Paull, J.C. (1995). Self-esteem and self-efficacy; perceived parenting and family climate; and depression in university students. *Journal of Clinical Psychology*, **51**, 467-481.
- 大野 久 (2008). 伝記研究により自己をとらえる 榎本 博明・岡田 努 (編) 自己心理学 1 自己心理学研究の歴史と方法 金子書房 pp. 129-149. (Ōno, H.)
- O'Rourke, A., & Hampson, S.E. (1999). Psychosocial outcomes after an MI: An evaluation of two approaches to rehabilitation. *Psychology, Health and Medicine*, **4**, 393-402.
- Piccolo, R.F., Judge, T.A., Takahashi, K., Watanabe, N., & Locke, E.A. (2005). Core self-evaluations in Japan: Relative effects on job satisfaction, life satisfaction, and happiness. *Journal of Organizational Behavior*, **26**, 965-984.
- Piper, W. (1978). *The little engine that could*. Complete original ed. New York: Grosset & Dunlap.
- Rauch, A., & Frese, M. (2007). Let's put the person back into entrepreneurship research: A meta-analysis on the relationship between business owners' personality traits, business creation, and success. *European Journal of Work and Organizational Psychology*, **16**, 353-385.
- Rosenthal, D.R., Gurney, R.M., & Moore, S.M. (1981). From trust to intimacy: A new inventory for examining Erikson's stages of psychosocial development. *Journal of Youth and Adolescence*, **10**, 525-537.
- 坂野 雄二 (1989). 一般性セルフ・エフィカシー尺度の妥当性の検討 早稲田大学人間科学研究, **2**, 91-98. (Sakano, Y. (1989). Verification of validity of general self-efficacy scale (GSES). *Waseda Journal of Human Sciences*, **2**, 91-98.)
- 坂野 雄二 (2002). 抑うつ気分の解消 坂野 雄二・前田 基成 (編) セルフ・エフィカシーの臨床心理学 北大路書房 pp. 72-81. (Sakano, Y.)
- 坂野 雄二・前田 基成 (編) (2002). セルフ・エフィカシーの臨床心理学 北大路書房 (Sakano, Y., & Maeda, M.)
- 坂野 雄二・東條 光彦 (1986). 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み 行動療法研究, **12**, 73-82. (Sakano, Y., & Tohjoh, M. (1986). The general self-efficacy scale (GSES): Scale development and validation. *Japanese Journal of Behavior Therapy*, **12**, 73-82.)
- Schwarzer, R. (1994). Optimistische Kompetenzerwartung: Zur Erfassung einer personellen Bewältigungsressource / Generalized self-efficacy: Assessment of a personal coping resource. *Diagnostica*, **40**, 105-123.
- Sherer, M., Maddux, J.E., Mercandante, B., Prentice-Dunn, S., Jacobs, B., & Rogers, R.W. (1982). The self-efficacy scale: Construction and validation. *Psychological Reports*, **51**, 663-671.
- Simmons, D. (1970). Development of an objective measure of identity achievement status. *Journal of Projective Techniques and Social Psychology*, **26**, 287-294.
- Smith, R.E. (1989). Effects of coping skills training on generalized self-efficacy and locus of control.



- Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 228-233.
- Speight, J.D., Rosenthal, K.S., Jones, B.J., & Gastenveld, P.M. (1995). Medcamp's effect on junior high school students' medical career self-efficacy. *Career Development Quarterly*, **43**, 285-295.
- 竹綱 誠一郎・鎌原 雅彦・沢崎 俊之 (1988). 自己効力に関する研究の動向と問題 教育心理学研究, **36**, 172-184.  
(Taketsuna, S., Kambara, M., & Sawazaki, T. (1988). Critical review of the studies on self-efficacy. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **36**, 172-184.)
- Tipton, R.M., & Worthington, E.L. (1984). The measurement of generalized self-efficacy: A study of construct validity. *Journal of Personality Assessment*, **48**, 545-548.
- 浦上 昌則 (2002). 職業指導 坂野雄二・前田基成 (編著) セルフ・エフィカシーの臨床心理学 北大路書房 pp. 204-217.  
(Urakami, M.)
- Wahl, A.K., Rustoen, T., Hanestad, B.R., Gjengedal, E., & Moum, T. (2005). Self-efficacy, pulmonary function, perceived health and global quality of life of cystic fibrosis patients. *Social Indicators Research*, **72**, 239-261.
- Waller, K.V., & Bates, R.C. (1992). Health locus of control and self-efficacy beliefs in a healthy elderly sample. *American Journal of Health Promotion*, **6**, 302-309.
- Waterman, A.S. (1982). Identity development from adolescence to adulthood: An extension of theory and a review of research. *Developmental Psychology*, **18**, 341-358.

—— 2009. 9. 2 受稿, 2010. 7. 3 受理 ——